

明治期における「赤ずきん」の受容について

—最初の邦訳と邦訳者を中心に—

野口 芳子

1. はじめに

赤ずきんの最初の邦訳は、翻訳資料研究本『明治期グリム童話翻訳集成』（1999年）や『日本におけるグリム童話翻訳書誌』（2000年）、『日本の近代化とグリム童話』（2005年）などでは、1902(明治35)年12月に雑誌『女鑑』に掲載された佐藤天風訳「ロートケッペン」であるとされてきた¹。しかし、鳥越信は2001年に『児童雑誌『少国民』の解題と細目』²で、『少国民』第8年16号(1896年8月1日)の目次蘭に挙げられた「赤ゑり娘」の下に³、自ら鍵カッコをつけて〔グリム〕と加筆している。そこで、これが本当にグリム童話「赤ずきん」であるかどうかについて、詳しく検証する必要がある。

これまでこの問題に取り組んできた研究者は川染ユリカのみである。川染は「日本における『赤ずきん』—明治期の教科書・雑誌に見る受容史」（2009年昭和女子大学大学院紀要論文）で⁴、「赤襟娘」を取り上げ、2人とも食べられたまま終わる結末と「少紅乗帽」という副題から、ペロー版の赤ずきんであると結論づけている。最初の邦訳がペロー版の赤頭巾であることには同意するが、それを裏付ける理由が上記の論文では不十分である。そのうえ、『少国民』に訳出した翻訳者が誰なのか調査していない。「翻案者の名は書かれていない」で済まされている⁵。本稿では、最初の邦訳版「赤ずきん」である「赤襟娘」を詳細に調査することによって、まず、グリム版に基づいた部分とペロー版に基づいた部分を明確にしていく。さらに無記名である翻訳者についても、『少国民』の執筆者を詳しく調査することによって、人物名を探っていきたい。

また、明治期全体で訳出された「赤ずきん」を詳しく調査し、その特徴を明かにする。それらの話は、ペロー版であるのか、グリム版であるのか、まず、それを明らかにする。また、多く訳された方の版は、なぜそちらの話が好まれたのか。その

理由についても考察する。

2. 最初の邦訳「赤襟娘」の文体と内容について

豆腐やに三里酒やに何里とかいふような小村がありまして、其處に、これまで見た事のない、奇麗な娘がいました。たゞ器顔の奇麗な計りでなく、心ばえ親切で、誠にすなをでありました⁶。(10頁)

上記の冒頭文では赤ずきんが住んでいる場所の描写が詳細に行われ、寂しい寒村であるとされている。グリム版には場所の描写はなく、ペロー版には「ある村」と書かれているにすぎない(30-31)⁷。それを豆腐屋に行くにも酒屋に行くにも何里も歩かなければならないような寒村であるという想定にしている。そこに、だれも見ることがないほど綺麗で、親切で、素直な娘が住んでいるとされているが、グリム版ではみんなに好かれる可愛い女の子であり(S.156)⁸、ペロー版ではこのうえもなく綺麗な女の子である(S.30)。外観に関する描写はペロー版に近いが、「親切で素直」という表現を付加したのは「みんなに好かれる」というグリム版の性格の良さを具体化したものとも受け取れる。とくに「素直」という、日本では女の子の長所として頻繁に使われる言葉が最初の邦訳に挿入されていることは注目し得る。

あるとき、お祖母さんが片山里に珍しい緋縮緬の襟を買って呉れましたから様子が一入よく見ゆる様になりました。村人は、この娘を呼ぶに、赤襟娘と申しました。(10頁)

グリム版では祖母がこの娘に真っ赤なビロードで帽子を作ってやる(S.156-157)。ペロー版では祖母が赤い頭巾を作らせるが、素材についての言及はない(S.30-31)。西洋で高級な素材であるビロードが、着物で高級な素材である縮緬に差し替えられたと考えると、この部分はペロー版より、グリム版に近いといえる。しかし、グリム版では祖母が自ら作るが、ペロー版では人に作らせる。自ら作るのではなく既製品を買う祖母の行動は、よりペロー版に近い行動といえよう。それにしても頭巾ではなく、緋縮緬の襟をつけた娘の話になっているところが、なんとも日本的で興味深い。読者にわかりやすいようにという配慮ともとれるが、日清戦争後の日本の国策に沿った変更とも解釈できる。つまり西洋の話を日本の話として紹介することで、『少国民』が子どもに西洋文化ではなく、大和魂を伝える雑誌でもあることをアピールしているともとれる。その傾向は母親が娘に持たせる見舞品にも表れている。

『お祖母さんがお風邪のさうだから、今から行つて、様子をお伺ひ申して来ておくれ。そして、この重箱のお菓子とお煮染を、お上げヨ。』⁹(10頁)

グリム版ではケーキとワインを持参し(S.157)、ペロー版ではガレット(クッキー)

とバター壺を持参する(S.30-31)。しかし、赤襟娘が持参するのは重箱に入った煮しめと菓子である。極端に日本化された品物であるが、病気の祖母の見舞品としては保存食である「煮しめ」は妥当な品物とも思える。また、グリム版では母親が多くの注意事項(涼しいうちにでかける、脇道にそれない、おはようとあいさつする、部屋をきょろきょろ見回さない)を伝えると、娘は「ちゃんとするわ」と答えて、母親と握手する(S.157)。これで契約成立というわけだ。ペロー版では母親は注意することなく娘を送り出す(S.30-31)。「赤襟娘」でも母親は何も言わず娘を送り出す。

木森の中の小径を通るときに、年取った狼に出逢ひました。狼は、娘を喰つて仕舞ふとして来たのですが、近くに、人々が働いて居たゝめ、かゝりはいたしません。(10-11頁)。

狼は娘を森で食べようとするが、人がいたので出来なかったという表現は、グリム版にはないが、ペロー版にはある。「森のなかにはあちこち樵がいたからです」と書かれている。(S.32-33)

『澤山遠くですか』と狼が又尋ねましたから、『エーイお前さんの今来た方の、突き當りの左の角で、大きな榎の下に井戸の有る家でヨ』と娘は答へました。(11頁)

グリム版では祖母の家は大きな櫛の木(Eichbäumen)が3本あり、ハシバミの垣根(Nußhecken)が¹⁰ある家だが(S.157)、ペロー版では森を抜けたところにある風車小屋の次の家であり(S.32-33)、シンボルマークの木はない。ここでは榎の木を入れてるので、グリム版を踏襲したものと思われる。

『私はこっちの道、お前さんは本道をいって、どちらが早いか早いくらをもませうヨ』と、狼はいひました。

狼は一目さんに駆け出しました。狼の通る道は藪中崖上などの近道で、娘の通る道は本道であったのです。そして、娘はそんなに早く往くにも及ばないと思つて、遊びながらゆきました。木の實をひろつたり、蝶を追つたり、見付次第に、草花を採つて束ねたりして、餘程の時間を費しました。(11頁)

上記の表現はグリム版にはないが、ペロー版にはほぼ同じ文章が存在するので、下記に引用する。

「私はこっちの道を通っていくからね、おまえさんはそっちの道を通っていくといいよ。どちらがはやくお祖母さんの家につくか競争しよう。」¹¹ そう言つて狼は、近道を通つて大いそぎで走つていきましたが、女の子は、遠回りの道を通つて、ハシバミの実をとつたり、蝶を追いかけたり、道端に咲いている小さな花を摘んで花束をこしらえたりして、遊びながら歩いていきました。(S.32-33,拙訳)

前掲の「赤襟娘」の引用文は、明らかに上記のペロー版の文章からとったものである。さらに、祖母の家に着いた狼は、トントンと戸を叩く。

うちから、『誰だ』狼『私です。赤襟の私です』と、出来るだけ、娘の口つきを真似て答へました。・・・狼はいとを引いて戸を開け、直ぐに部屋に飛び込んで、お祖母さんの喉に喰ひつき、ガリガリガリと喰って仕舞ひました。二三日前から、狼は何も食べないで居たからです。(11-12頁)

グリム版では狼は祖母を「丸呑みする(verschlucken)」(S.158)ののだが、ここでは「ガリガリガリと喰う」のである、なぜなら、2、3日前から何も食べていなかったからである。これはペロー版の表現と一致する。狼は祖母を「たちまちガツガツと食べて(dévoré)しまいました。これで3日以上何も食べていなかったからです」(S.32-33,拙訳)となっているからだ。ペロー版の狼はグリム版のように丸呑みする(avalé)のでも、食べる(manger)のでもなく、がつつ食べる(dévoré)のである。それゆえ食べられた人間はかみ砕かれてしまい救出され得ないのである。

『誰だ』。聲が大さう大いから、娘は、ビツクリしました。けれども、お祖母さんは、風を引いたといふから、あんなに聲が枯れたのであると思ひ、『私ですよ、赤襟の私ですよ。』(12頁)

祖母の声が枯れているのは風邪を引いたからだと思うのはペロー版で(S.34-35)、グリム版では祖母に扮した狼は赤ずきんが挨拶しても返事をしない(S.158)。

(狼は)娘にいひました。『お菓子も煮染も、今たべたくないから、棚の上に置いて、はやく此所へ来て、お話しなさいヨ。御苦労だツたね』

娘は、臥床にはいりました。目を大きくして、お祖母さんの様子を眺めました。(12-13頁)

狼が娘に対して、持参品の置き場を指定したり、今は食べないと言ったりするのは、ペロー版のものである(S.34-35)。グリム版には持参品に対する会話は皆無である(S.158)。さらに祖母の容姿に対する不信感を口にするところで、赤襟娘は祖母の腕、足、耳、目、歯の順にその大きさに驚く(13頁)。この5カ所と順序はペロー版と一致する(S.34-35)。グリム版は耳、目、手、口の4カ所だけである(S.158-159)。

『さうさ、お前を喰って仕舞ふによいのね』

かういひまして、可愛さうに、ヒラリと身を起こして娘の上に飛び上り、コリコリと、骨ぐるみに娘を喰って仕舞ひました。(13頁)

ここでも狼は娘を飲み込むのではなく、骨ぐるみ食べるのである。グリム版のように嘔まずに呑みこむ(verschlingen)のではなく(S.159)、ペロー版のように食べて(manger)しまうのである(S.34-35)。その後、グリム版では狩人が来て、寝ている狼の腹を切って祖母と赤ずきんを救出してくれるのであるが(S.159)、ペロー版では救

出劇はなく、ふたりとも死んだままである(S.34-35)。そして最後に、娘さん、知らない人のいうことを聞いてはダメですよ、という意味の教訓が付けられる(S.36-37)。

「赤襟娘」では娘も祖母も食べられたままで話は終わるが、教訓は付されていない。

以上、「赤襟娘」の話を詳細に見ていくと、多くの点でペロー版の話を踏襲したものであることがわかる。しかし、グリム版の表現が付加されている個所も見られる。赤ずきんの性格が「親切で素直」であるのは、「みんなに好かれる」というグリム版の性格の良さを具体化したものともとれる。また、祖母の家の所在地を大きな榎がある場所と描写しているのは、グリム版の3本の櫓の木がある場所から取った表現と考えられる。なお「赤襟娘」には明治期の翻訳にはめずらしく、4枚もの日本風にアレンジされた挿絵が入れられている¹²。

3. 「赤襟娘」に込められた教訓と当時の社会的背景

最後は救済されて終わる「幸福な結末」ではなく、娘と祖母が狼に食べられて終わる「不幸な結末」で終るこの話からは、見ず知らずの者に対して警戒心を持たず、不用意に個人情報を与えてしまうと命取りになるという教訓を読み取ることができる。つまり、狼に対して警戒心を持つこと、命じられた仕事は迅速にすること、道草はしないことなど人生における重要な教訓を教えているのである。もし、これらの注意事項を守らなければ、本人も家族も死んでしまうのである。不用意な言動と行動は身を亡ぼすという教訓の方が、そういうことをしても最後には救われるという教訓より、当時の社会情勢を考えると時宜を得たものといえよう。

この話が『少国民』に掲載されたのは1896(明治29)年8月で日清戦争後である。1894(明治27)年7月25日から1895(明治28)年3月にかけて行われた朝鮮半島(李氏朝鮮)をめぐる日本と清国の戦争では、日本が清に勝利した。『小国民』の発行高は、「日清戦争中が最も出た頂上で、一万五千部」だったという¹³。まさに絶頂期を迎えたそのとき、『小国民』は危機に直面する。手旗信号を凶入りで解説した「海軍の信号」という記事が、海軍省令26号「戦時中ニ軍機ニ関スルコトハ記載スベカラズ」に違反し、軍の機密漏洩罪に当たるとされ1回目の筆禍に遭い、日清戦争後の政府の弱腰外交を批判した文が、治安維持法違反と認定され2回目の筆禍に遭う¹⁴。その結果、1895(明治28)年9月15日号が発禁処分される。しかし、処分を受けて2か月後、『小国民』の文字を1つだけ変えた雑誌『少国民』を刊行する。

「^{ちいさ}小さき国民に比すれば、^{わか}少き国民の方、意義も幾分か妥当なるおや」と書いて、『少国民』2号で「小」から「少」に変えたことの苦しい弁解を読者にしている¹⁵。

1895年11月12日に第1号、12月1日に第2号、12月15日に第3号を出す、

その後戦争が終了して法律も変わり、発禁処分が解除される。早速 1896(明治 29)年 1 月 1 日から元の『小国民』の巻数に戻り、第 8 年 1 号と表記される。名前だけは「小」ではなく「少」を使った『少国民』に変更されたままだが、『小国民』の継続版といえる。ただし、経営難で経営者が高橋省三から八木定太郎に代わり、出版社は学齡館が破産して北陸館に移行する¹⁶。資金不足という経営上の問題点を抱えたまま、『少国民』は継続されることになる。

狼に漏らした不用意な情報が赤襟娘と祖母の命を奪うことになったように、執筆者の不用意な言動が雑誌の死(発行禁止)を招いたのである。その際、救助者が現れることはなかった。このことを教訓に、編集者石井研堂は他人の力ではなく、自らの力で再生を果たしたのである。戦争終結により発禁処分が解除されると、別名の『少国民』で出版していた雑誌を、名称はそのままして元の『小国民』の巻数と号数に戻す。それが第 8 年(巻)である。その年(1896 年)に「赤ずきん」が「赤襟娘」として紹介されるのである。

不注意や失敗は命取りになるという教訓を教えるペロー版の話の方が、獵師の出現によって救出されるグリム版の話より、はるかに現実的で時宜を得たものである。日本で最初に紹介された「赤ずきん」は不注意や油断は身を亡ぼすという厳しい道徳を説くペロー版の話だったのである。

4. 「赤襟娘」の訳者について

「豆腐やに三里酒やに何里とかいふような小村がありまして、其處に、これまで見た事のない、綺麗な娘がいました」という冒頭の文は、西洋昔話とは思えないほど日本化された文章である。それゆえこの話が「赤ずきん」の翻案であるということが、長年わからなかったのであろう。訳者名は記載されていないが、おそらく中川霞城であると思われる。

『少国民』をすべて調査した結果、訳出されているグリム童話はこれまで 14 話とされていたが、18 話あることが判明した¹⁷。そのうち中川によると思われるものは 12 話ある。西翁という筆名が入っているのが 7 話、無署名のものが 5 話ある。無署名のものは文体などの特徴から、中川霞城の訳と思われる。なぜなら、訳者名が不明あるいは知名度が低い者は「無名氏」と書かれているからである。不明者(初心者)が無名氏であるとする、無署名者は書かなくても自明の者、つまりこの雑誌でグリム童話の翻訳を一手に引き受けている中川霞城ということになる。なお、無署名の 5 話とは「雪姫の話」(KHM53 白雪姫)、「忠猫の策略」(初版 33 長靴をいた猫)、「鈍太郎物語」(KHM83 幸せなハンス)、「赤襟娘」(KHM26 赤ずきん)、

「可憐娘」(KHM24 ホレばあさん、グリム童話であることを筆者が発見した話)である。なお、上記 5 話のうちの 1 話「雪姫の話」に関しては、『日本におけるグリム童話翻訳書誌』¹⁸には中川霞城訳と明記されている。

翻訳者が中川霞城であるとするもう 1 つの理由は文体である。中川の翻訳は石井研堂や高橋大華と異なり、「たり、けり、べし」などの古文調ではなく、「であります。からです」などの現代文調を特徴とする。赤襟娘の訳は古文調ではなく、現代文調で書かれているのである。

第 8 年 2 号の「快笛」(KHM165 怪鳥グライフ)が無名氏の訳で、文体などからおそらく浜田四郎の訳ではないかと思われる。浜田四郎に関しては後ほど詳しく述べるが、この話は今回の調査により、新しくグリム童話であることを発見した 4 話のうちの 1 話である。なお、『小国民』に掲載されたグリム童話の調査結果は、注 17 の一覧表を参照してほしい。

この時期の小国民(第 8 年 12 号、1896 年 6 月 18 日)で西洋童話は中川の他に、浜田四郎が「紫楼」という筆名で英語から訳している。浜田は石井研堂の 8 歳年下の実弟で、「紫楼」は「四郎」という呼び名からとったもので、当時は東京高商の学生であった¹⁹。卒業後、浜田は博文館に入社し『実業世界太平洋』誌の編集者を勤める²⁰。その後、三越百貨店の初代宣伝部長として活躍し、「今日は三越、明日は帝劇」の有名なキャッチフレーズを作るのである²¹。アンデルセンの「王様の新衣装」を「新衣皇帝」という題で訳したとき、彼は「紫楼」という号を用いて文語調の文体で訳している。文体から判断すると、「雌雄楼主人」も浜田の筆名(号)ではないかと思われる。第 8 年 2 号で「快笛」が「無名氏」訳になっているのは、浜田というまだ無名の新人、翻訳界で無名の人という意味で「無名氏」と表記されたのではないだろうか。

これは筆者による発見であるが、「赤襟娘」が出た 2 か月後の『小国民』第 8 年 20 号に、本邦初の「ホレばあさん」の翻訳が「可憐娘」という題名で訳されている。鳥越信もこれがグリム童話 24 番「ホレばあさん」の翻案であるとはわからなかったようだ。『少国民』の解題と細目を詳細に記した鳥越の目次には、「可憐娘」の後に〔グリム〕という加筆は見当たらない。それゆえ、この話はこれまでグリム童話であると認識されてこなかったのであろう。しかし、話の内容をよく読むと、2 人いる娘のうち働き者で気立てが良い娘の口からは花と玉が(原文では金づくめになる)、怠け者で意地悪な娘の口からは蛇や蛙が(原文ではコールタールまみれになる)など、「ホレばあさん」の話と重なる部分が多い。おそらくこれは「ホレばあさん」の本邦初の翻案であろう。訳者名は記載されていないが、「赤襟娘」とよく似た「ですます」調の文体であり、無署名であることから、おそらく中川霞城に

よるものであろう。

「赤襟娘」の話は「グリム」と指摘されているが、内容は「ペロー」である。娘も祖母も狼に食べられたままで終わるからである。さらに、途中の森の中で狼が娘を食べようとするが、人々が働いていたためあきらめるといった表現があったり、こっちの道とあっちの道とどちらが速いか競争するという表現があったりするからである。これらの表現は、グリム版にはなく、ペロー版に含まれているものである。

中川霞城はフランス語ではなくドイツ語が堪能で、教師として教えていたこともあるので²²、フランスの昔話である「ペロー」版からの翻案であるとしたら、彼の翻訳ではないという見方もできる。しかし、ドイツ語版の赤ずきんは、当時ペロー版の内容をアレンジしたものがかなり多く出回っていたようである。国際児童文学館が所蔵しているドイツ語版の本に「ちいさな赤ずきん」(Das kleine Rothkäppchen)という本があるが、これはグスタフ・ホルティンク(Gustav Holting)がフランス語の原典から自由に翻案(frei nach französischen)したものであり、1842年にベルリンで出版された本である²³。日本の図書館にその本が所蔵されているということは、フランス版から翻案された赤ずきんの本が、ドイツ語版でもかなり多く出回っていたと判断することができる。中川霞城はおそらく、ドイツ語で書かれたペロー版の話をも「赤襟娘」として紹介したのであろう。

5. 明治期に出版された「赤ずきん」の邦訳について

1) 明治期に邦訳された「赤ずきん」の一覧表

明治期に邦訳された「赤ずきん」は、全部で10篇ある。それらを出版年順に番号をつけて紹介すると下記のようなになる。

- (1)1896(明治 29)年 8 月 未署名(中川霞城)「赤襟娘」(小紅乗帽翻案)『少国民』第 8 年 16 号
- (2)1902((明治 35)年 12 月 佐藤天風訳「ロートケッペン」『女鑑』国光社
- (3)1904(明治 37)年 3 月 百島操訳「赤帽子の娘」『福音新報』福音新報社
- (4)1908(明治 41)年 9 月 楊花訳「小さな赤帽」『家庭雑誌』家庭雑誌社
- (5)1908(明治 41)年 10 月 木村小舟訳「紅帽子」『家庭お伽噺』博文堂
- (6)1909(明治 42)年 3 月 和田垣健三／星野久成訳「赤帽さん」『家庭お伽噺』小川尚栄堂
- (7) 1909(明治 42)年 12 月 百島操訳「赤帽子の娘」『グリム御伽噺』通俗文庫第 9 編 内外出版協会

- (8)1910(明治 43)年 8-12 月 長谷川元吉訳注「赤い頭巾の小さい児」英語の友(8月-9月)THE ENGLISH STUDENTS COMPANION 建文館
- (9) 1910(明治 43)年 9 月 近藤敏三郎訳「赤帽さん」『新訳解説／グリムお伽噺』精華堂
- (10) 1911(明治 44)年 2 月 日野蕨村訳「赤帽子」『家庭講話／ドイツお伽噺』岡村書店

2) 主人公の名前と翻訳における改変箇所

主人公の名前で最も多いのは「赤帽子」という表現で 6 話(3,4,5,6,7,9)ある。なかにはドイツ語を原語のまま使用して、「ロートケッペン」としているものも 2 話(2 と 4、4 は文中で使用)ある。小娘を「赤ずきん」と表現しているのは英語教科書だけで、そこに添えられた訳文に使われているに過ぎない。英語版の“LITTLE RED RIDING-HOOD”を「赤い頭巾の小さい児」と訳しているのである。ようするに、日本語の本や雑誌に掲載されたものでは、大幅に日本化された最初の訳以外、明治期の邦訳はすべてグリム版の題名である「赤帽子」を使っているのである。

題名はグリム版から取っているが、内容はすべてグリム版に忠実な訳であるかということ、そういうわけではない。上記の 10 話のなかで比較的原文に忠実な訳といえるものは、百島操訳の 2 話(3 と 7)と佐藤天風訳(2)と楊花訳(4)である。百島は「ピロードの」帽子を「奇妙な」帽子、「檜」を「松」、「花束」を「花環」と誤訳したり、狩人が「鉄砲の台尻で狼を殴る」という表現を付加したりしているが、ほぼグリム版に添った内容を訳出している²⁴。しかし後日談(赤帽子が祖母と協力して狼を溺死させる話)は訳出していない。

後日談を載せているのは、佐藤天風訳と楊花訳の 2 話(2 と 4)である。ここではロートケッペンを「可愛い」子ではなく、「柔順^{おとな}しい」子に変えたり、見舞いに持参する品を「ワインとケーキ」から「此酒と此肉」に変えたりしている。また猟師が狼の腹を切るのは「はさみ」ではなく「腰の刀」にしている。さらに後日談ではケーキを焼肉にしている。酒が葡萄酒と初めて訳されたのが 1914(大正 3)年²⁵、ワインと訳されたのは 1956(昭和 31)年であるから²⁶、酒という訳語になるのは納得がいく。しかしケーキは最初の「赤襟娘」(1896)で「お菓子」と訳されているのだから、「肉」や「焼肉」という訳語には違和感を覚える。英訳本を調査した結果、ケーキが「美味しい肉」(nice meat)に変更され、さらに後日談では「焼肉」(baked meat)に変更されているものが 2 冊見つかった。いずれの本にも訳者名や出版年は明記されていないが、ハインツ・ツィルンバウアー(Heinz Zirnbauer)の調査結果によると、

挿絵画家のエドワード・ヘンリー・ウェーナート (Edward Henry Wehnert. 1813-1868)が翻訳者も兼ねており、出版年も下記であるという²⁷。

(1)Household Stories. Collected by the Brothers Grimm. Newly translated. With twohundred and forty illustrations by Edward H. Wehnert. 2Bde London: Addey & Co. 1853 S.128-131.

(2)Household Stories. Collected by the Brothers Grimm. Newly translated. With twohundred and forty illustrations by Edward H. Wehnert. London: George Routledge and Sons, 1857 S.72-74.

筆者が入手した2冊の英訳本で「ケーキ」が「肉」に変更されているということは、佐藤天風が「肉」に変更された英訳本を使用した可能性も十分考えられる。上記の2冊はいずれも「赤ずきん」を“Little Red-Cap”と表記しており、“Little Red Riding Hood”ではない。「赤頭巾」ではなく「赤帽子」という訳語が明治期に多いのは、これらの英訳本の影響かもしれない。佐藤はドイツ語の原題「ロートケッペン」(Rotkäppchen)をそのまま題名にしているが、文中では帽子に「しゃっぽ」とルビを振り、ロートケッペン「赤い小帽子」という意味であると解説している。ドイツ語の帽子は「カッペ」(Kappe)で、フランス語が「シャポー」(Chapeau)であるので、両方混在したような英語版を底本として使用していたのであろうか。

ケーキを「肉」に変更しているのは佐藤(2)の他に、楊花訳(4)、和田垣／星野訳(6)、近藤訳(9)の4話である。変更の理由は使用した英語版で肉に変えられていたからである。なぜ、英訳本では肉に改変されたのであろう。

1850年代の英国は、1845年から1849年に発生したアイルランドの「ポテト飢饉」で200万人以上の人々が餓死し、食糧難が続いていたという²⁸。栄養失調の病人にとって、肉は最高の見舞品であろう。1853年出版のウェーナート訳で病気の祖母への見舞品がケーキから肉に改変されたのは、おそらく上記のような英国の食糧事情が反映されたのであろう。

楊花訳(4)は『家庭雑誌』に掲載されているが、ロートケッペンを「花の様なそしておとな温雅しい」小娘とし、あとは佐藤訳をほぼそのまま踏襲したかのような訳文に終始している。しかも、ほぼ同じ内容で、後日談まで訳出している。祖母に化けた狼の顔を見るとき、暗くて「マッチを擦って」見るところと、無事に帰宅すると「母様も父様も」大喜びしたと、父親を登場させているところが、楊花独自の表現といえよう。堺利彦が家庭のなかに社会主義を導入しようとして出版した『家庭雑誌』でも、この当時の女性に求められるジェンダーは「おとな温雅さや優しさ」であったのである。

木村訳(5)は祖母の誕生日に、母親は「あか紅帽子」に風呂敷に包んだお菓子箱を届け

てくれという。非ラシャで作った紅帽子は目立ったので、狼に目をつけられる。祖母と娘は共に狼に食べられるが、獵師が来て鉄砲で狼を殺してくれたので、2人は救出される。ハサミや刀で腹を裂かず、鉄砲で撃っても2人を救出できるのである。ただ不思議なのは、狼は「突然^{いきなり}お婆さんを食って」しまうのだが、紅帽子を^{つかま}捕へ、「ガリガリと噛んで食ひました」となっている点だ。食べられた者が救出されるには、がりがり噛まず、呑み込まなければならない。グリム版では常に「丸呑みする」(verschlingen)という単語が使われているが、ペロー版では「ガリガリ喰う」(dévorer)という単語が使われている。ここではガリガリ喰われたのに救出されるのである。なんとも不自然である。本来、食べられて終わる話であったのに、救出される類話の結末を付加したのではないだろうか。児童文学者でもある木村小舟は1冊の本からではなく、類話も参考にしながら訳したのかもしれない。挿絵の紅帽子が、つばのある帽子を被っている点も他に類を見ない。カップを逆にしたようなシュバルム地方の民族衣装の赤帽子(未婚の処女を表す)か、ベレー帽のようなつばのない帽子(ベール由来の髪を隠す用具)ではなく、権力の象徴であるつば付きの帽子をこの娘は被っているのである。

和田垣／星野訳(6)の「赤帽さん」は赤ん坊と訳されているが10歳で、毎日1里も2里も離れた医者の方へ薬を取りに行ったり、美味しいもの(肉や果物)を買いに行ったりして、病気の祖母の用事を果たす。祖母を喰って寝床で寝ていた狼を赤帽さんが揺り起こすと、飛びかかってきて、娘は無残にも食べられてしまう。世の中には狼のような大悪人がいるので、素性の知れぬ者に気を許してはならないという教訓が「解説」として付加されている。これは明確にペロー版である。しかし、この赤帽さんは、母親とではなく、祖母と一緒に住んでいるようである。買い物から帰ると「お老母さん、只今」と言っているから、西口佑子は同居であるという²⁹。母親が遣いに出す場面が欠如しており、孫が自ら病気の祖母を看病し、薬や食品を買いに行くのであれば、「孫と祖母」同居家族という判断もありうる。日本昔話では「父母と子」家族ではなく、「爺婆と子」家族が頻出するので、訳者がそのような設定に変えたのかもしれない。母親は出現しないので3世代ではなく、あくまで2世代同居家族である。

西口が挿絵から調査したところによると、和田垣が使用した英訳本は筆者の調査で割り出した上記の本と同じ内容で題名のみ異なる下記の本だという³⁰。

Grimm's Fairy Tales. Being the Household Stories Collected by the Brothers Grimm. With two hundred Illustrations by E.H. Wehnert. London George Routledge & Sons. New York: E .P .Dutton and Co.1890.

訳者の和田垣健三は東京帝国大学の経済学の教授で英文学者でもあり、1880年か

ら 1884 年までケンブリッジ大学とベルリン大学に留学した経験を持つ英語とドイツ語に堪能な学者である³¹。星野久成は『英文法と作文』(1903)の著者である。2 人の共著ということは、この本はドイツ語ではなく英語からの重訳と判断してよいだろう。最初の緒言で「お伽噺」にフェアリー・テールズとルビを振っていることから、底本は英訳本であったと思われる。本の題名には『GRIMM'S FAIRY TALES グリム原著 家庭お伽噺』とグリム童話であることが明記されているが、「赤帽さん」に関してはウエーナート訳同様、悲劇で終わるペロー版の話が収録されている。

近藤訳(9)の「赤帽さん」は赤坊あかんぼうと訳しながら、7 歳の女の子で絹の帽子を被り、「肉と酒」を持って祖母の家に行くが、祖母も娘も狼に食べられてしまう。最後に猟師が来るが、狼を鉄砲で撃ち殺して話が終わり、2 人の救出については語られない。食べられたままであるのか、救出されたのか不明である。ただ、悪い狼が殺されたことのみが強調されている。「悪者は、皆この狼のやうに、悪い報ひの来るとも、忘れてはなりません」と解説している³²。

近藤訳は和田垣／星野訳と変更点が類似しているところが目につくが、異なる箇所も多い。娘の年齢は和田垣／星野訳では 10 歳だが、近藤訳では 7 歳である点、近藤訳でのみ帽子の素材が絹と明記されている点、和田垣／星野訳では赤ずきんは祖母と住んでいるが、近藤訳では母親と住んでいる点、見舞品が和田垣／星野訳では肉果物薬だが、近藤訳では肉と酒である点、結末は和田垣／星野訳では両者が喰われて終わるが、近藤訳では猟師が現れて狼の頭を銃で打ち抜くが、2 人の救出は不明のままである点などである。

同じような変更は前述の英訳本にも加えられている。2 冊の英訳本はケーキを肉に改変しただけでなく、結末も和田垣／星野訳のように改変して悲劇に終わっており、佐藤訳や楊花訳のように、後日談も収録している。近藤、和田垣／星野、佐藤、楊花など明治期の翻訳者が上記のような英訳本を底本として使用していた可能性はかなり濃厚であると思われる。

日野訳(10)では持参品は「葡萄酒とビスケット」である。赤ずきんは祖母に化けた狼に耳目手口の順に大きい理由を聞くが、ここでは手耳目の順になり、口が欠如している。猟師は火縄銃ではなく、猟刀で狼の腹を切って 2 人を救出する。ほぼ原文の内容を踏襲した訳だが、狼に対する質問が 4 つではなく 3 つになり、口が欠如している点が異なる。日野蕨村は実名を久津見息忠やすただといい、東京曙新聞、日本絵入新聞、萬朝報に勤務した経歴を持つ新聞記者である³³。

英語の友の訳(9)では頭巾のついた赤いマントを着た美しい子が「菓子とバター」を持って叔母(祖母)³⁴の見舞いに行く。父親が迎えに行くからと母親は娘に言う。森で木を伐る人がいるので、狼は娘を襲えない。森の向こうの村の端の家まで、この

道とあの道を通って競争しようと言った狼は娘に言う。狼は3日間食べていなかったため、祖母を貪り食う。娘は狼の寝床と一緒にいる。目鼻耳歯が大きい理由を聞く。狼が娘を食べようとしたとき、父親が来て、狼の背中に刺股(熊手)を刺して殺す。娘は父親と一緒に帰宅する。

ペロー版のように2人とも食われたままではないので、ペロー版とグリム版を混成したような話になっている。娘は父親に救出されるが、祖母は喰われたままで終わる。英語教科書を訳したものであるということは、英語版では自由に改変されたものが数多く出回っていたということであろう。

調査の結果、1845年出版のフェリックス・サマリー(Felix Summerly)による改変版が見つかった。そこでは父親は樵で母親は家事をしながら糸紡ぎをしている。8歳の赤ずきんは蜂蜜とバターを持参して祖母の家に行く。2人とも狼に食べられて終わる本来の話(ペロー版)を、赤ずきんの悲鳴を聞いて、樵の父親が駆けつけて狼を殺し赤ずきんを救う話にしている³⁵。(8)の英語テキストには母親が糸車を回す挿絵が挿入されているので、この種の英語版を基に英語教科書を編集したのではないかと思われる。

6. まとめ

『少国民』の「赤襟娘」は鳥越信が〔グリム〕と付記したにもかかわらず、内容から判断して、ペロー版によるものであった。日本で最初に紹介された「赤ずきん」は、2人とも救済されるグリム版ではなく2人とも死ぬペロー版であった。訳者・中川霞城は、決まりを守らず自由に自分勝手なことをしていると、取り返しがつかないことになるという教訓を伝えるには、グリム版の幸福な結末よりペロー版の悲劇的結末の方が効果的であると考えたのであろう。

明治期に訳された「赤ずきん」でペロー版のものは、これ以外では和田垣健三/星野久成訳「赤帽さん」訳(6)のみである。本の題名にグリム原著と明記しているにもかかわらず、「教訓」まで付加したペロー版をより忠実に紹介している。世の中には狼のような大悪人がいるので、素性の知れぬ者に気を許してはならないという教訓を教えようとしている。

一方、グリム版のものは7話もある。内容は原文にほぼ忠実な訳であるが、ドイツ語版からの訳か、英語版からの訳か、出典が不明のものが多い。「ロートケッペン」とドイツ語の単語をそのまま日本語に置き換えているので、一見、ドイツ語から訳したかのような印象を与えるが、詳細に調べると、「ケーキ」が「肉」に変えられたり、帽子に「シャッポ」とフランス語のルビが入れられたり、使用された底

本が何であったのか断定するのは難しい。祖母に持参する品物が「肉」に改変されていることを重視すると、同様の改変が多く見られる英語版からの訳と判断することもできる。フランス語版を改変したドイツ語の翻案本の存在が国際児童文学館で確認できたので、ドイツ語を得意とする中川霞城も、フランス語の原本を自由に改変したドイツ語の翻案本を使ってペロー童話を翻訳したのか、あるいは、改変された英語訳を使用して訳したのかもしれない。

明治期に訳された 10 話のうち、ペロー版が 2 話、グリム版が 7 話、両版混成版が 1 話ということは、その後の普及のグリム版優位を示唆している。娘と祖母が食べられて終わるペローの話には、子どもが守らねばならない教訓が詰め込まれている。しかし、たった 1 度の過ちで命まで取られてしまうという結末は、厳格すぎると判断されたのであろう。猟師がやって来て救出してくれる結末の方が、厳しい躰を施そうとする明治期の人々にとっても、より好ましい結末であると判断されたのであろう。

注

- 1 川戸道昭／榊原貴教編『明治期グリム童話翻訳集成』第 2 巻 ナダ出版センター 1999 年 213-219 頁。川戸道昭／野口芳子／榊原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』2000 年 ナダ出版センター 227 頁。奈倉洋子『日本の近代化とグリム童話』世界思想社 2005 年 181 頁。
- 2 鳥越信『児童雑誌『小国民』の解題と細目』風間書房 2001 年、311 頁。
- 3 『小国民』の目次には「赤ゑり娘」と表記され、本文では「赤襟娘」と表記されている。
- 4 川染エリカ「日本における『赤ずきん』—明治期の教科書・雑誌に見る受容史」昭和女子大学大学院 英米文学研究会紀要「EVERGREEN」第 30 号 2009 年、1-20 頁。
- 5 同上、1 頁。
- 6 「赤襟娘」『小国民』第 8 年 16 号 1896 年 10-13 頁。以後引用頁は本文に記入。
- 7 Charles Perrault, Contes de Fées, Die Märchen. dtv. zweisprachig übersetzt von Ulrich Friedlich Müller. München: dtv 1962, S.30-37, S.30-31. ペロー版引用頁数は本文に記入、日本語訳は拙訳。
- 8 Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Hrsg. v. Heinz Röllele, Bd.1, Stuttgart: Reclam, 1980, S.156-160. hier S.156. 以後引用頁数は本文に記入
- 9 原文では会話文は一重カッコではなく、二重カッコで表示されている。この会話文は原文では前の二重カッコが抜け落ち、後ろにのみに二重カッコがつけ

- られている。ここではわかりやすいように、前の二重カッコを付加している。
- 10 Nuß とは木の実のことで、特にクルミやハシバミ(ヘーゼルナッツ)の実を指す。Hecke 垣根であるので、垣根になる木の実の樹木はハシバミと考えられる。
- 11 赤襟娘の会話文は原文通り『 』で表現しているが、現代の正書法では会話文は「 」で表記するので、ここでは「 」を使用している。
- 12 最期の資料に掲載されている4枚の挿絵を参照。
- 13 山口恒夫『石井研堂』リプトポート、1986年、155頁。
- 14 同上、156頁。
- 15 同上、159頁。
- 16 同上、163頁。
- 17 『小国民』および『少国民』に訳出されているグリム童話は、これまで14話とされていたが、筆者が改めて調査したところ下記の18話であることが判明した。下記の表で * で表示した4話が新しく発見したものである。

【『小国民』と『少国民』に訳出されているグリム童話一覧表】

- 『小国民』3,4号(明治22年9,10月)「狼と七匹の羊」KHM5 西翁
- 『小国民』10,11,12,13,15,18号(明治23年3,4,5,6,7,9月)「雪姫の話」KHM53 無署名
- 『小国民』22,23,24,25号(明治23年11,12月)「忠猫の策略」初版33 無署名
- * 『小国民』第3年17,19号(明治24年9,10月)「金のなる木」KHM130 秋の舎主人
- 『小国民』第4年20,21号(明治25年10,11月)「鈍太郎物語」KHM83 無署名
- 『小国民』第4年23,24号(明治25年12月)「拇太郎」KHM37 西翁
- 『小国民』第5年2号(明治26年1月)「街道音楽」KHM27 西翁
- 『小国民』第5年5,7号(明治26年3,4月)「拇太郎の遊歴」KHM45 西翁
- * 『少国民』第8年2号(明治29年1月)「快笛」KHM165、無名氏(浜田?)
- 『少国民』第8年2号(明治29年1月)「魔法婆」〔グリム〕KHM69 西翁
- 『少国民』第8年4号(明治29年2月)「蝦蟇の王の話」KHM1 西翁
- 『少国民』第8年12号(明治29年5月)「烏に成った七人の子」KHM25 西翁
- * 『少国民』第8年16号(明治29年年8月)「赤襟娘」KHM26 無署名
- 『少国民』第8年18号(明治29年9月)「仕立屋貞六」KHM20 雌雄楼主人(浜田?)
- * 『少国民』第8年20号(明治29年10月)「可憐娘」KHM24 無署名
- 『少国民』第9年6,10号(明治30年3,5月)「戦慄物語」KHM4 雌雄楼主人
- 『少国民』第13年2号(明治34年1月)「三つの願望」KHM87 まぼろし生
- 『少国民』第13年4号(明治34年2月)「つのぶえ物語」KHM28 鈴木吉武
- 18 川戸道昭／野口芳子／榊原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』前掲書 131頁
- 19 山口恒夫、前掲書、164頁。
- 20 同上、185頁
- 21 同上、286頁。
- 22 中川霞城は、英語、理化学、鉱物学、植物学など様々な学問を学んでから原口隆造に師事してドイツ語を学ぶ。原口は欧学舎(独逸学校)でルドルフ・レーマンからドイツ語を学んだ人である。中川は京都の師範学校でドイツ語や

化学を教えてから、東京大学予備門でドイツ語を教えている。野口芳子『グリム童話のメタファー』勁草書房、2016年、174-175頁。『京都薬科大学百年史』京都薬科大学、1985年、24-26頁。

- ²³ **Das kleine Rotkäppchen. Frei nach französischen von Gustav Holting
Illustriert von Theodor Hosemann. Berlin Winckelmann 1842.**
- ²⁴ 百島が使用したのは、グリム版の第6版か7版(決定版)であろう。なぜなら、母親が娘に「おはよう」と祖母に挨拶するよう指示しているからである。この表現は第6版(1850年)から入れられたものである。
- ²⁵ 165冊の「赤ずきん」を筆者が調査した結果、葡萄酒の初出は下記の本である。小笠原昌斎訳注「赤帽さん」『グリムお伽噺講義』上巻 精華書院 1914(大正3)年10月、日独語併記 持参品はお菓子(パン)と葡萄酒。
- ²⁶ 植田敏郎訳「赤ずきん」『グリム童話宝玉集1』宝文館 1956(昭和31)年12月に「ケーキとワインのびん」が初めて出現する。(筆者による165冊の調査結果)
- ²⁷ **Heinz Zirnbauer: Grimms Märchen mit englischen Augen. In: Brüder Grimm Gedenken. Bd. 2. Marburg, Elwert 1975, S. 203-245.hier S. 215.**
- ²⁸ **James Vernon: Hunger, A Modern History, Harvard University Press, 2007, S. 41-47.**
- ²⁹ 西口佑子「和田垣健三・星野久成訳『グリム原著 家庭お伽噺』一底本と翻訳」専修大学人文論集 99号、2016年、470頁。
- ³⁰ 同上、476頁。
- ³¹ 三島憲之『和田垣健三と明治・大正期の経済学界(1) 和田垣の経歴と活動を中心に』『東北公益文科大学総合研究論集 forum21』2002年 27-40頁。
- ³² 近藤敏三郎訳「赤帽さん」『新訳解説／グリムお伽噺』精華堂 1910年 70頁。
- ³³ 新訂増補人物レファレンス事典 明治・大正・昭和戦前編Ⅱ 日外アソシエーツ 2010年 671頁。
- ³⁴ **Grandmother** を最初は「叔母さん」、次から「お祖母さん」と訳している。
- ³⁵ **Felix Summerly edited: The Traditional Faery Tales of Little Red Riding Hood Beauty and the Beast & Jack and the Bean Stalk. Illustrated by Eminent Modern Artists, & Edited by Felix Summerly, London 1845.**

【参考資料・挿絵】「赤襟娘」『少国民』第8年16号(国際児童文学館所蔵)

挿絵(1)



挿絵(2)



挿絵(3)



挿絵(4)

